

## 報 告

### 第四回国際中世哲学会に出席して

長 沢 信 寿

第四回国際中世哲学会はカナダのモントリオール大学で、昨年8月27日から9月2日まで、E. Gilson が President になり、ルーヴァン大学の Ph. Delhayе、マギル大学の R. Klibansky、モントリオール大学の B. M. Lacroix、トロント大学の L. K. Shook が Vice-president となって、開催された。この学会の全体的主題は“中世における学芸と哲学” (Arts libéraux et philosophie au moyen âge) で、古代の末期からルネッサンスに至る間の学芸と哲学に関する研究を報告発表し、これを討議することであった。私は本会の代表者として学術会議から派遣せられて、出席したので、この学会の模様を簡単に報告しておきたい。

8月27日からと言っても、この日は出席者の登録と歓迎のレセプションが大学の Social Center で行われたただけであった。私は同日の午後ヴァンクーヴァからモントリオールに到着すると、すぐ大学の Social Center へ行った。このモントリオール大学のキャンパスは小高い丘の裾に東西にわたっているが、Social Center というのはその東端 Av. Maplewood にあって、いかにもその名にふさわしく鬱蒼とした maple の樹々に取り囲まれている。A.-M. Landry 教授が自ら Social Center のポーチに出ていて迎えてくれた。すぐに宿舎になっていた学生寮に案内してもらったが、その時案内してくれたのは、この大学の大学院で中世哲学を研究している学生であった。室に落ちついてから、寮の事務所へ行って私と同じく本会から派遣されて出席することになっていた高田三郎教授と高田武四郎教授が到着されたかどうかを尋ねた。そして高田三郎教授はまだ到着されないが、高田武四郎教授は出席を取り消されたことを聴いて、意外な気がした。

翌28日は月曜日で、学会は、実質的には、この日から始まった。会場は大学の西端の l'aile Z であった。これは寮からは可なり離れているし、出席者の或る

人が言ったように、そこへ行く道は too complicated であった。少し早く会場へ行ったが、会場で前年本会で講演をしてくださったウトレヒト大学の教授 De Vogel 女史に会った。ついで京都の聖トマス学院のプリオット院長にも会った。そしてプリオット院長から、高田武四郎教授が病気で出発の直前出席を見合せられたことを聞いた。ところで会はずまずモントリオール大学の副学長 P. Lacoste の歓迎の辞に始まった。それにつづいて Gilson が開会の辞を述べた。彼は可なり高齢の筈であるが、実に矍鑠たるもので、その風貌と言え、その音声と言え、少しも老人らしいところがなかった。Gilson の開会の辞が終るとソルボンヌの碩学 H.-I. Marrou が Les Arts libéraux dans l' Antiquité という Conférence d' ouverture を行った。彼は、周知のように、大著 Saint Augustin et la fin de la culture antique の著者である。彼は多少早口のフランス語で喋ったので、しばしば聴きとりにくかったが、私の理解し得たところでは、まずギリシアにおける science technique の発達から説き起し、プラトーンやブルータルコスを経て scolaire exégétique に至った過程を分析的に且つ綿密に辿った。それから中世の一般教養学や ἐγκύκλιος παιδεία について述べ、五つの学芸学科がどうして形成されたかを語り、科学的・技術的分析の方法が出て来る過程を述べて終った。これはこの碩学でなければできないような名講演であった。この講演が終ると早速 Klibansky が長い質問をしたが、それにつづいてシカゴ大学の R. Mckeen その他の人人との質疑応答が行われた。

この日の午後は Symposium I で、Les Arts libéraux chez les Pères de l'Église et les auteurs de la Renaissance Carolingienne に関するものであった。Mckeen が司会者になって、サラマンカ大学の M. C. Diaz y Diaz、リル大学の G. Mathon、ミルウォーキーの Marquette 大学の L. Wallach の3人が研究報告を行った。これらの研究報告はいずれこの第四回国際中世哲学会の紀要に載せられることであろうから省略しておこう。この日プリオット院長に案内してもらって、モントリオール大学中世研究所の図書館を訪れ、深い印象をうけた。今晚8時からモントリオール市のわれわれに対する歓迎のレセプションが Centre Récréatif Maisonneuve で行われることになっていたので、参会者は数台のバスに分乗して会場に赴いた。そしてこの会場ではからずも、九州大学で中世哲学の

講義をしておられる L.-M. Béliveau 神父に会った。私が九州大学を退官して以来、日本にいても、彼に会う機会はあまりなかった。彼の話だと実に6年ぶりであった。またニューヨークの Long Island 大学の History and Political Science の Associate Professor 渡辺守道博士にお目にかかった。両高田教授が姿を見せず、日本人は僕一人で甚だ心細く感じていた矢先きなので、両氏に会ったことは非常にうれしかったし、またこの会を通して両氏に大変お世話になった。このレセプションでまず市長の Jean Drapeau がカッシドールスやポエティウスの言葉を引用して、フランス語の長い歓迎の挨拶を述べたが、それが終ると Klibansky が静かなラテン語で articulate に発音しながら、答辞を述べた。彼は中世の研究が年々盛んになってゆくことを述べると、一転して日本における中世哲学の研究を称揚し、特にわれわれの中世哲学学会 (Societas japonica philosophiae medii aevi) の名をあげて、原典から研究や翻訳が行われていることに言及した。これはまったく予期しなかったことなので、私も驚いたが、Klibansky の言葉と同時に人々の眼が一整に並んで着席していた渡辺博士と私とに向けられた。この日の昼休みにポーチでプリオット神父と立話をしていたら、Landry が来て、日本の中世哲学学会のことを英語では何というのかと訊ねたが、あとで考えて見ると、それはおそらく Klibansky が今夕の答辞のために Landry に訊ねたからなのであろう。レセプションのすんだのはもう12時近くであったが、寮へ帰って高田教授が到着されたことを知った。

第三日目(8月29日)は午前9時から Symposium II で、その主題は Arts et sciences en dehors du monde latin であった。イーランのテヘラン大学の S. H. Nasr がフランス語で司会し、ワシントンのジョージタウン大学の M. Fakhry、ニューヨークのイエシヴァ大学の A. Hyman、テサロニケ大学の E. Moutsopoulos が研究報告をした。プリオット院長が Klibansky に紹介してくれたので、昨夕のレセプションの席上で日本の中世哲学研究を称賛してくれたことの礼を述べたところ、あれは少しも誇張して言ったのではなく、自分がかねがね日本人の知的な優秀性に感銘を得ていたので、それを披露したのでであると答えた。そして彼は故九鬼周造教授を始めとして、三木清、桑原武夫、沢瀉久敏その他の諸氏の名をあげ、特に九鬼教授の早い逝去を惜んだ。また井筒教授が、自分の同僚とし

てマギル大学にいますが、アラビア学者としての造詣の深さは測り知れないものがあると言った。この日から31日まで、午後は部会に分れて研究発表が行われた。ただ30日の午後だけは部会を開かず、モントリオール大学のキャンパスを見学することになっていた。この日の部会の研究発表で私の聴いたものは P. H. Baker の *Liberal Arts as Philosophical Liberation : St. Augustine's De Magistro* ; G.-H. Allard の *Arts libéraux et langage chez St. Augustin* ; M. L. Colish の *Eleventh-Century Grammar in the Thought of St. Anselm* であった。少数の例外を除いて、発表のあとには質疑応答があったが、用語が英仏独伊西という風に分れているために、質疑と応答とがどこか食いちがうような場合があったし、Colish のように、その英語が極めて私に catch しにくいものもあった。なお研究部会がすんでから Special Committee Session があり、モントリオール大学の Verdier が中世後期およびルネッサンス初期の図像学について講演をしたが、おそい時間であったので聴かなかった。

第四日目(30日)は午前が Symposium III で、その主題は *Les Arts libéraux aux XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècles* であった。Klibansky が司会者の席について、ルール大学の L. Hoedl, リヴァプール大学の T. M. Gibson 女史, トロント大学の R. O' Donnel が報告した。この Symposium で印象に残ったのは Klibansky に対するシカゴ大学の R. Mckeon の質問と、それに対する前者の要領のよい答弁であった。午後は、さきに記したように、キャンパスの見学であった。随分広い大学であるが、人文科学よりもむしろ自然科学系統の学問に力を入れているように見受けられたし、新しい設備もどしどし増設せられていた。聴くところによると、大学の全予算の70パーセントは国が負担しているが、今の市長がフランス系の人であるので、この機会に大学を拡張するのだという話であった。5時30分からは Klibansky が哲学の主任教授をつとめている McGill 大学のレセプションである。英仏両語が公用語になっているカナダでは、モントリオール大学が仏語大学であるのに対して、マギル大学は英語大学である。少し早く出かけて Klibansky を研究室に訪れた。彼はこの時も日本の学界と学者とを讃え、取り分けて井筒教授の深い学殖をほめ、手近かの書架から井筒教授の近著を取り出して示し、是非一読するよう勧めた。彼は、井筒氏の学才は稀に見るものであって、これほどす

くれたアラビヤ学の教授はどここの大学にもいないし、本学の誇りにしていると言  
い、彼は今北欧を旅行中であるが、もしそうでなかったらこの度の学会に出席し  
て、おおいに活動したことであろうと言った。それからアラビヤ学の研究室へ案  
内してくれた。ところでマギル大学は古い大学で、中世の科学、特に医学に関す  
る文献が沢山集っている。レセプションの行われた広間も古風な、豪華なもので  
あった。この大学へ来る頃から降り出していた雨が帰る時には大雨になり、なか  
なかタクシーが拾えなくて、高田、渡辺両氏と三人、ずぶ濡れになった。モン  
リオール大学で8時から *assemblée générale* があったが、そういうわけで出席し  
なかった。あとで De Vogel 教授に聴いたところでは、話がまとまらず、終っ  
たのは随分おそかったそうである。

第五日目(31日)は午前9時から *Symposium IV* が行われ、その主題は *Les Arts libéraux dans l'Université du XIII<sup>e</sup> siècle* であった。司会者はバリのサン・ジャック 修道院の老 M.-D. Chenu であった。報告者はルーヴェンの Ph. Delhayé, ニューヨーク市大の P. Kibre, コペンハーゲン大学の H. Roos であった。しかし私は日本領事館へ行く用があったので、この *Symposium* は中座して、午後の部会に出た。第二部会の、ローマの *Pontificia Università San Tommaso d'Aquino* の E. T. Toccafondi の *Il pensiero di San Tommaso sulle Arti liberali* という研究発表は、プリオット院長が司会した。そのほか G. Verbeke の *Arts libéraux et morale d'après saint Thomas*; R. Bultot の *Grammatica, ethica et contemptus mundi aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles*; K. A. Sprenghard の *Die Bedeutung des Artistenfakultät für die Entwicklung der Modernen Philosophie des XIV. und XV. Jahrhunderts* などを聴いた。部会は今日が最後であって、部会のあとで *Special Committee* があり、中世のテキストの刊行のことや宗教的ダンスの講演があったが、出席しなかった。

第六日目(9月1日)は最後の *Symposium V* であって、*Les Arts libéraux aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles* がその主題であった。ソルボンヌの M. de Gandillac が司会者になり、ハーバード大学の J. E. Murdoch, ニュー・ヘーヴンの J. A. Weisheipl が報告をしたが、私はこの日も領事館へ行く用があって出られなかった。午後は *Panel* であって、この学会の名誉総裁であるケベック州の文化相 Jean-

Noël Tremblay が挨拶をし、もう一度 E. Gilson が司会者となって、J.-C. Falardeau, トロント大学の中世研究所の A. Pegis, モントリオール大学の L.-M. Pégis が現代の Arts libéraux et humanisme について講演をした。これはこの第四回国際中世哲学会の主題“中世における学芸と哲学”の総括りをするものであったが、humanitas に関して講演者と質問者 Klibansky やコロンビア大学の P. O. Kristeller などの間に大変興味深い論議がかわされた。この論議には非常に教えられるところがあった。その後、午後5時から I. Madkour の“中世におけるアラビヤ思想とキリスト教思想との関係”という Special Committee Session が行われた。これでこの度の学会は実質的には終了したと言ってもよいであろう。われわれは中世研究所の図書館でこの学会が支障なく予定通りに終了したことを Cocktail で祝い、引きつづいてモントリオール大学哲学部の中世哲学研究科主催の、聖アルベルツス・マグヌス修道院の晩餐会に臨んだ。これはすこぶるなごやかな、且つ楽しい饗宴であった。プリオット院長は昨夜モントリオールを去り、高田教授も今夜パリに向かって立った。私はニューヨークの渡辺博士およびその御家族とともに、翌2日、Expo 67を訪問することになっていた。

この学会のなかば頃、休憩室で De Vogel 女史に出会ったら、彼女は私に“あなたはこの学会に満足していますか”と訊ねた。おおいに満足していますと答えると同時に、私も彼女に同じことを訊ねた。そして彼女もまた同じ答えをした。これが周到な準備ののちに、細心の注意を払って運営せられた第四回国際中世哲学会に対する、すべての参加者の気もちであろう。(了)。